特集 イノシシ被害を考える

問農林振興課
☎㉙5115

目次

02 特集 イノシシ被害を考える

10 岩国市と鳥取市は姉妹都市提携20周年を迎えます

11 青少年海外派遣事業・岩国基地内大学

12 岩国市の予防接種

14 みんなの夢をはぐくむ交付金

15 健康教室・食推さんの食べてみんさいおいしいけぇ

16 市政PICK－UP

18 すまいる

19 まちの話題

22 くらしの情報

26 おでかけ情報

28 みんなの写真館・市長夢日記

表紙の写真

イノシシ被害を考える

イノシシの野生での寿命は10歳前後と言われており、成獣になると100kgを超えるものもいます。運動能力は極めて高く、時速約45kmで走り、1.2mの柵も越えることができます。成長するとオスは単独行動し、メスは子や姉妹と群れを作ります。

岩国市における鳥獣害

近年、全国的に問題となっているのが野生鳥獣による被害です。

特に深刻なのは農作物への被害で、岩国市でも中山間地域を中心に被害が多発しており、平成25年度の被害額は3570万円に上ります。

また農作物への被害だけでなく、クマによる人身被害がたびたび発生しているほか、イノシシやサルが市街地に出没し、危害を加えるケースも見られるようになってきました。昨年、イノシシが市街地で立て続けに市民を負傷させた事件は、市民に衝撃を与えました。

被害額の大半はイノシシとサル

平成25年度の岩国市における鳥獣被害の内訳を表したのが次の図です。

市内の農作物被害額のうち65・1％がイノシシ、27・6％がサルによるもので、この2種類で被害額全体の9割以上を占めています。残りの7・3％はクマ、タヌキのほかヒヨドリ、カラスといった鳥類によるものです。

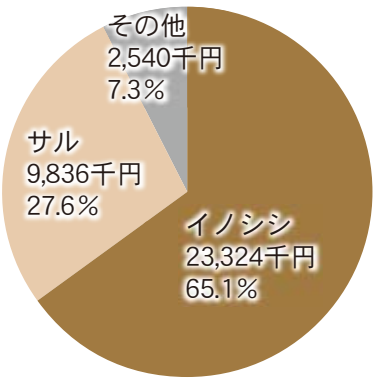
近隣の市町村ではシカによる被害が問題となっている地域も多く、いずれは市内でもシカによる被害が起こる可能性は低くありません。

イノシシ被害を考える

昔は少なかった野生鳥獣による農作物被害が増えてきたのはなぜでしょうか。そして被害を減らすためにすべきことは何なのでしょうか。

今回の特集では、イノシシの専門家の意見や被害対策に成功している地域を紹介し、イノシシの被害について考えていきたいと思います。

平成 25 年度
農作物被害額35,700千円



意識が変われば被害は防げる

人間を恐れ、山の中で暮らしていた獣が、
なぜ人里や町の中にまで姿を現すようになったのか。
被害を減らすためにどのような対策を取るべきなのか。
長年に渡り、イノシシ研究を行う専門家に話を聞きました。

宇都宮大学
雑草と里山の科学教育研究センター
小寺（こでら）　祐二（ゆうじ）　講師

プロフィール

1970年生まれ。農学博士。
東京農工大学在学中から島根県浜田市でイノシシの生態について調査を行う。東京農工大学大学院連合農学研究科博士課程終了後、島根県中山間地域研究センター特別研究員、長崎県鳥獣対策専門員を経て、現職。平成18年「イノシシの基礎生態と保護管理に関する研究」で野生生物保護学会奨励賞を受賞。野生生物の個体管理や自然生態系の保全の分野で活躍中。

イノシシ被害は防げる

「あらゆる野生哺乳類の中で最も被害対策が簡単なのがイノシシです」

小寺さんはそう断言します。全国各地でサルやシカなど野生動物の農作物被害が多発していますが、被害の防ぎ方が科学的にわかっているのはイノシシだけだそうです。

「こうすれば被害を防げるという方法は分かっています。あとはそれを実行するかどうかだけです」

被害が急増してきた背景

イノシシの被害が全国的に問題になり始めたのは１９７０年代です。なぜその頃から急にイノシシの被害が問題になり始めたのでしょうか。そこには人の生活様式や社会の変化が大きく関わっていると小寺さんは話します。

「イノシシの分布域が急速に回復した大きな要因は、日本社会にエネルギー革命が起こったこと、それに伴い高度経済成長をしたこと、そして農村部が過疎化し始めたことです」

変化した日本人の生活

「その頃まで、日本人にとって山は生活に欠かせない場所でした。燃料である薪や炭を採り、水田を作り、焼き畑を行い、次々に山を切り開いていきました。イノシシなどの野生動物は住む場所を奪われ、数を減らし、人里から遠く離れた山奥へ追いやられていました。

ところが、エネルギー革命により状況が変わります。燃料は薪や炭から電気やガス、石油などに変わりました。牛や馬を使っていた稲作は、トラクターなどの機械や化学肥料を使うことで生産効率が飛躍的に上昇しました。経済構造が農林業などの第一次産業から第二次、第三次産業中心へと変化していくことにより、農村部から都市部へと人口が流出しました。

今まで人の手が入っていた山は放置されはじめました」

近づく人と野生動物の距離

「エネルギー革命により放置され始めた山は、じわじわとやぶが広がり、木が生え、野生動物にとって住みやすい環境になっていきました。人の暮らす領域と野生動物の暮らす領域の距離が徐々に近づいてきたのです」

小寺さんは、イノシシに発信機をつけ、行動の調査を行っています。

「イノシシは、広葉樹林、竹林、耕作放棄地を非常に好むことが分かりました。３つの場所には共通点があります。姿を隠すことができること、餌が豊富であるということです」

人がイノシシを餌付けしている

イノシシは非常に警戒心が強く臆病な動物です。しかし、姿を隠せる場所があれば、安心して人のすぐ近くまでやってくるそうです。

「田畑の近くにできた耕作放棄地などはイノシシにとって格好の隠れ場所となり、そこを拠点に活動します。耕作放棄地には用水路があることも多く、イノシシからしてみれば、食事、ベッド、プール付きの高級ホテルを人間が用意してくれているようなものだといえます。おいしい農作物の味を覚えたイノシシは、それを目当てにし始めます。農作物は自然界の餌より栄養価が高いため、死亡率が減少し、数が増えていきます」

捕獲中心の対策では意味がない

「正しい柵の設置と適切な管理。これさえできれば、イノシシの被害はほぼ防げます。誤った設置と不適切な管理をするのであれば、それはお金と労力の無駄です」

イノシシに関していえば、捕獲中心の対策では農作物への被害は減らず、捕獲はあくまで補助的な手段にするべきだと小寺さんは話します。

「イノシシは生息環境が良ければ安定的に繁殖し、その結果、捕獲頭数も増えます。ただし、被害は減らない。目的は捕獲頭数を増やすことではなく、被害を減らすことのはずです」

草刈りの重要性

「守るべき農地をしっかりと柵で囲んだら、柵の内側と外側にイノシシが姿を隠すやぶ・草むらをなくします。柵の外側は、理想をいえば柵から10ｍ、最低でも３ｍは草刈りをします。この環境整備が維持できなければ、金網の柵でも電気柵でも意味はありません」

大人の膝丈ほどの草が生えていれば、イノシシの警戒心は極端に下がるそうです。柵と草むらが近ければ、イノシシは柵を壊して侵入してしまいます。

地域住民の意識と結束が大事

「最も大事なのは、地域住民が意識を高く持つことです。いくらお金をかけても人任せでは被害はなくなりません。正しい知識を身に付け、それを忠実に実行することが大事です」

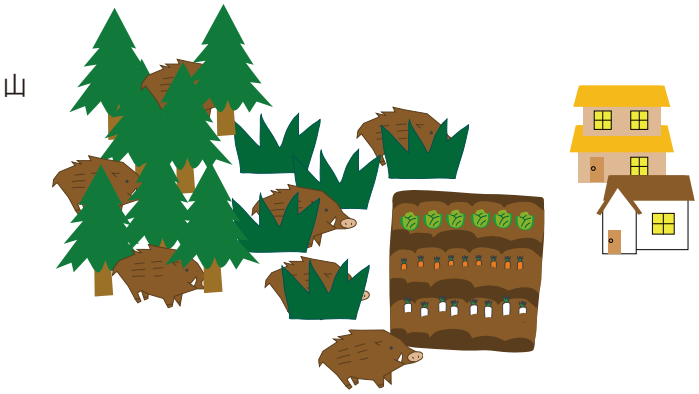
小寺さんはこうも教えてくれました。

「イノシシは非常に学習能力が高い動物です。誤った設置をした柵から侵入し農作物にありつけば、次からは柵を農作物の目印にし、何とか柵を壊そうとし始めます。自分の田や畑だけでなく、地域の農地を住民全員で守るんだという気持ちが必要です」

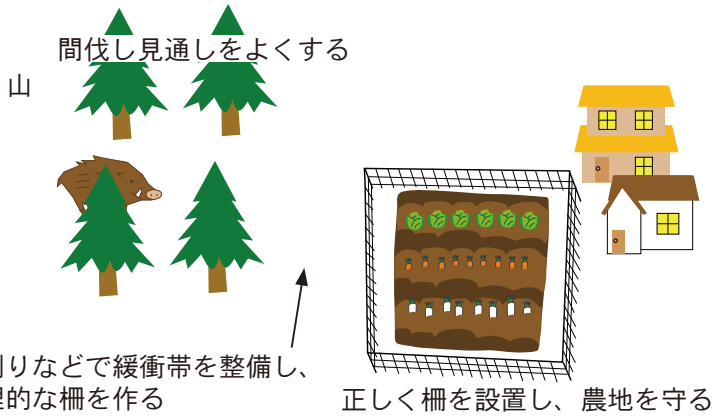
小寺さんのお話のポイント！

- ●被害が少なかった時代は、人とイノシシの住む領域の境界が明確で住み分けができていた。
- ●人とイノシシの住む領域の境界があいまいになり、イノシシが人里に出やすい状況になった。
- ●イノシシの捕獲だけを進めても、農作物の被害は減らない。
- ●正しく柵を設置し、柵の外側３ｍと柵の内側の草刈りを徹底すれば、被害はほぼなくなる。
- ●地域住民が結束し、正しい知識を元に、正しい対策をすることが重要。

人とイノシシの住む領域の境界があいまい ×

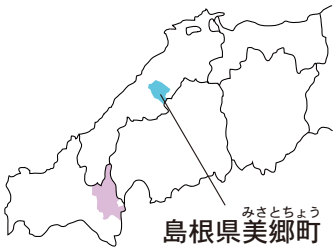


人とイノシシの住む領域の境界が明確 ○



先進地から学ぶ －島根県美郷町－

やっかいモノだったイノシシを
地域おこしの資源に変えて
昔ながらの活力を取り戻した
まちがあります。



面積：282.92 ㎢
人口：5,198 人（12月1日現在）
島根県のほぼ中央に位置し、2004年に邑智町と大和村が合併して美郷町となった。町内を貫く江の川やその支流によって侵食された急峻な地形が多く、町の大半を山林が占めている。

島根県美郷町。人口約５２００人、高齢化率47％の小さな町が大きな注目を浴びています。イノシシの被害防止だけでなく、駆除したイノシシの肉や皮を資源化し、地域活性化に結びつけたその取り組みを学ぼうと、全国各地から相次ぐ視察の数はなんと年間80回を数えます。

２月18日、美郷町を訪ねました。

みんなで学び みんなで守る

最初に訪ねたのは吾郷地区にある「青空サロン」。吾郷婦人会のお母さんたちが鳥獣被害に強い畑づくりを学んでいる実習ほ場です。

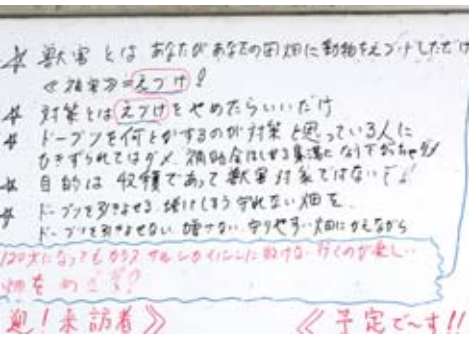
吾郷婦人会が鳥獣被害に強い畑づくりを学んでいる実習ほ場「青空サロン」

作業をしていた畑ヶ迫カズエさんと中林洋子さんに話を聞いて驚いたのは意識の高さです。「あんたんちの近くにイノシシの足跡があったけえ、気を付けんといけんね」「もう少し様子を見て必要じゃったらあそこにも柵をつけようね」などという会話が普通に交わされます。

「サルがおったら花火で追い払ったり、近くに花火がなかったら、石を投げたり、それもなかったら靴を投げてでも追い払うよ。追い払わん人がおったらサルが人を恐れんくなるからね」と笑いながら話す二人。サルが逃げていった地区の人に携帯電話で連絡して、追い払いを要請するほどの徹底ぶりです。

転機は研修会

住民の意識が変わった転機について、婦人会長の安田兼子さんは、平成18年に婦人会で主催した獣害対策研修会だったと話します。研修後、この先生にもっと教えてもらいたいという声があがりました。住民が土地を提供し、学ぶ場として皆で作ったのが「青空サロン」です。研修会の講師を務めた井上雅央さんに指導をお願いしました。



青空サロンに設置されたボードには指導者の井上さんによる刺激的な言葉が並ぶ

井上さんの指導の元、住民の意識は変わっていきます。被害をなくすには餌付けをやめればいいこと、餌付けをやめるためにはひそみ場と餌をなくすこと。それまでは「自分がイノシシの餌付けをしているなんて思いもしなかった」と言う中林さん。

ひそみ場になる植木の手入れを中林さんが紹介（上）良い例/（下）悪い例

失敗しては勉強し対策をし、次第に被害は減っていきました。手をかけて作った野菜を収穫できる喜び。野菜作りが楽しくてたまらなくなってきたといいます。

地域住民の交流の場へ

野菜作りが楽しくなってきたら、今度はおいしい野菜が作りたくなりみんなでまた勉強。おいしい野菜ができたら今度はそれを売ってみたくなり、みんなで市場を作り、毎週朝市を開くようになりました。

今や朝市や畑は住民交流の場、まさにサロンになっています。駐在さんが来て振り込め詐欺の話をしたり、保健師が来て血圧を測ったり。高齢化の進む地域の見守りにもつながっています。

井上雅央（いのうえまさてる）さん

元農研機構近畿中国四国農業研究センター鳥獣被害研究チーム長。
退職後、同センター専門員。
宮崎県、熊本県、広島県、静岡県などでアドバイザーとして継続的に活動をしている。

―農作物の被害が減らないのはなぜですか？

ハエの多い台所はハエが悪いのではなく、ハエを呼び寄せ増やしている台所に問題があるとみんな思うでしょ。イノシシやサルも同じなんですよ。

動物は餌があれば増えるし、いい住処があればそこに住みます。農作物が被害に遭ったということは、あなたの田畑で動物の餌付けに成功したということなんです。ハエが発生しないように台所の環境を改善するのと同じで、イノシシやサルが発生しないように田畑や集落の環境を改善する必要があるんです。

―どのように改善したらいいのでしょう？

知らず知らずのうちに行っている餌付けをやめることです。餌付けになってしまう条件は二つ。

一番目は、人なれ学習をさせてしまうこと。二番目は、満足できるだけの餌を長期間用意してしまうこと。つまり、この二つをやめるだけで被害はなくなるんです。

人なれ学習を進めるのは、集落や田畑のそばにあるひそみ場です。だったらひそみ場をなくしてやればいい。姿を見かけたら必ず追い払えばいい。

餌には食べられて人間の「腹が立つ餌」と「腹が立たない餌」の二種類がありますが、どちらも食べさせてはいけません。腐った果樹の放置や生ごみの廃棄などはもってのほかですが、稲刈り後のヒコバエや秋に草刈りをしたため冬に生える青草もイノシシにとっては立派なご馳走なんです。

―被害をなくすために最も重要なことは？

勉強し、正しい知識を学ぶことです。昔の人はイノシシなどの対策方法を知っていました。明治から昭和にかけて一時期あった被害の少ない時代にその文化が途切れてしまった。そこでどうなったか。被害を訴えてきた住民に対し、行政は安易に補助金で柵を支給しました。それが間違いだったんです。行政は「被害とは何か」を住民が勉強する機会を作るべきだったんです。被害の拡大には、行政にも大きな責任があると思っています。

自分の田や畑は自分で守る

「獣害対策の基本はディフェンスです。そこがしっかりできて初めて駆除が生きてきます」と話すのは町役場産業振興課の安田亮さんです。平成11年に獣害対策の担当者になった安田さんは形骸化した駆除事業に驚いたといいます。「狩猟と被害対策である駆除はまったく別物なのに、実情はその二つがぐちゃぐちゃでした」

安田さんは猟友会に丸投げされていた町の駆除の仕組みを大きく変えます。

「駆除によって利益を得るのは農家です。駆除活動の主体を猟友会から農家を柱とした住民組織に変更しました」。自分の田や畑は自分で守る、という意識の高まりとともに駆除の効果も上がっていきました。

やっかいモノから地域の資源へ

イノシシ対策の継続のために、駆除で捕獲されたイノシシをなんとか活用できないだろうか、そんな思いから誕生したのが「おおち山※くじら生産者組合」です。食肉処理施設には廃業したフランス鴨の加工場を活用し、生きたままイノシシを運び込み、おいしい肉として処理する仕組みを作りました。

肉だけでなく皮も活用できるのではないか、ということで始まったのが吾郷婦人会による皮革製品作りです。週1回、集会所に集まって作る財布や筆入れ、名刺入れなどの小物は、町の特産品に成長しようとしています。

一つずつ手縫いで作る皮革製品。それぞれで風合いが違い、美郷町でしか手に入らない

主役は住民

「獣害対策に限ったことではなく、補助金頼みでは何もうまくいきません。この地区では、食肉処理も皮革製品作りも町のお金に頼らずに全部住民が自力でやっています。たとえば、子供にどんな優秀な家庭教師をつけても本人に意欲がなければダメなんです。地域の主役は住民です。その力を引き出すための黒子に徹することが行政の本当の役割だと思っています」

美郷町が「山くじらの郷」に成長することを願って黒子に徹する安田さんの言葉です。

美郷町役場産業振興課　安田亮さん

※山くじらとは、江戸時代などに用いられたイノシシ肉の呼び名

被害を防ぐためにすべきこと

ここまで専門家の話や先進地の事例を見てきました。
では具体的にどのようにすればいいのでしょうか。
またどのような補助があるのでしょうか。

①地域全体の意識を高め、正しい知識を身に付ける

まず最初に、住民全体で話し合いを行ったり、研修会などを利用して正しい知識を身に付けたりすることが重要です。地域住民の結束と正しい知識が獣害対策を成功させるカギです。

市では、住民の皆さんの要望に応じて研修会を行っています。

サツマイモを守る竹マルチ。作物を守るテクニックはたくさんある

農事組合法人いきいきファーム美和
代表　吉見幸久（よしみゆきひさ）さん

市が行った研修会で、イノシシは平地に生息する動物で、人間によって山に追い払われていたということを学びました。それからは、イノシシ対策についての考え方が変わり、どうすれば上手く住み分けできるのかを工夫するべきだと考えるようになりました。

研修を受けて、美和町生見の志谷地区では柵の設置、緩衝帯の整備などを行い、確実に効果が出ています。高齢化が進む中で維持管理をどのようにするかが今後の課題ですが、若い力を呼び戻すなど工夫しながらやれば、被害はますます減っていくと思います。

まずは勉強することが大事です。正しい知識を学ぶことが一番の被害対策だと思います。

②侵入防止柵の設置

守るべき農地を侵入防止柵でしっかりと囲います。
進入防止策を設置する際には、補助を受けることができる場合があります。

対象	補助対象
個人	防止柵設置資材費の２分の１を補助 上限15万円の半額７万５千円まで
２戸以上	２戸以上での防止柵設置資材費の２分の１を補助 上限150万円の半額75万円まで
３戸以上	３戸以上での防止柵設置資材の全部を支給。上限はないが、設置後14年間は管理報告の必要あり

３戸以上での設置を対象に支給される防止柵。設置は住民が行う

ポイント！　柵は正しく設置し、適切に維持管理しなければ、効果がありません

③イノシシの好きなものの排除、草むらや藪などのひそみ場の撤去

柵の設置と合わせて「人里に美味しいものはない」「隠れる場所がなく人間は怖い」と思わせることが目的です。

収穫されず放置されたカキは、動物に餌をまいているようなもの

耕作放棄地はイノシシの絶好のひそみ場。拠点にして人なれが進む

草刈りや伐採などを行い、人里と山との間に心理的な柵を作る

ポイント！　人間にとって不要なものでも動物にはごちそうになることがあります

ポイント！　少なくとも柵の内側と外側３ｍに、膝丈以上の草むらを残してはいけません

④被害を与えるイノシシをわなや猟銃などで捕獲

①～③までの対策を行えば、被害はかなり減ります。
それでも被害を与えるイノシシは狙って捕獲することが必要です。

市では自衛わな用に箱わなの無料貸し出しを行っています

狩猟捕獲と有害鳥獣捕獲

野生鳥獣の捕獲には狩猟免許が必要で、狩猟捕獲と有害鳥獣捕獲の２種類があります。

狩猟捕獲は、狩猟期間に限り特定の動物を捕獲することができるもので、狩猟免許の取得、県への登録が必要です。イノシシは対象ですが、ニホンザルは捕獲対象ではありません。

サル用大型囲いわな。狩猟ではなく、有害鳥獣捕獲になる

編集後記

取材に当たって多くの農家に話を聞きました。皆さんに共通するのは「やり場のない無念さ」です。手塩にかけて育てきた農作物が収穫しようとしたまさにその日に奪われている。怒りの矛先が動物に向かうのも無理からぬことだと思います。「こんなことが続くならもう農業はやめる」と語った人もいました。

話を聞く中で強く印象に残ったのは、獣害対策に対する考え方について、行政と住民の間に大きな隔たりがある場合が少なくないということです。また地域住民の中で考え方が異なる場合もあります。いろいろな考え方はありますが、目指しているのは「農作物を無事に収穫する」という同じゴールのはずです。それぞれの言い分をよく聞き、被害をくい止めるための最良の方法は何なのか、行政と地域住民が一体となって考えていくことが重要なのではないでしょうか。

農村部から都市部への人口流出による高齢化、過疎化はまさに現在、中山間地域が直面している大きな課題です。そして獣害増加の一因もそこにあり、解決のキーポイントでもあります。獣害対策を考えることは、今後の中山間地域の在り方について考えることなのかもしれません。　【広報班　中都】